【一般口演1】 第3席

『千金翼方』の鍼灸

東京　篠原 孝市

隋唐時代を代表する医学全書『千金方』と『千金翼方』の中に見られる鍼灸資料の、鍼灸医学史上の意義は、概ね二つである。その一つは言うまでもなく、古代の孔穴の学の体系を指し示す『明堂』の復元に関わる一資料としての価値である。別の一つは北宋時代に『銅人』が登場するまでの、古代鍼灸の様々な様相を伝える資料としての側面である。とりわけ後者の面については、これら両書に遅れて出現した『外台秘要方』『医心方』『太平聖惠方』あるいは『素問』王冰注などとならぶ必須の資料となっている。

『千金翼方』は『千金方』と同著者でありながら、その内容や構成にはかなりの開きがある。鍼灸部分についても一見して同様のことが言えるのであるが、両資料の厳密な異と同ということになると、それを詳細に解明した研究のあるを知らない。

筆者は先年、『千金方』の鍼灸について考究した。このたびはその続考として『千金翼方』の鍼灸部分を総括するのであるが、特に先行する『千金方』との同一点と相違点について解明することにつとめた。